

勤

東西の賢聖といわれる人々や古今の富貴と称される人々は、皆この「勤」という字から出頭してきました。

当山には、このようなことが書かれた掛軸が残っています。私達の日々のつとめが、その人の足跡となり、その人の人生を彩っていきます。すてきな彩りの人生であることを祈念すると共に、その彩りを感じていくには、それを行ずるより他に表わしようがないということを知らねばなりません。

「私の父の思い出」

長年、海上保安庁に勤務し、最後に呉の海上保安大学の校長をした父が亡くなつて、すでに十八年がたち、父の思い出話をすることも日々少なくなつてきました。

先日、いろいろな法要に使つた法語をとりまとめている引出しを整理していた住職

れました。そして多くの助言や手助けをしてくれました。私に子や孫が出来、守られる立場から、自分も守るべき側の立場となりました。私自身、年を重ねても、父の思い、先祖の思いを心において、亡き方と共に関わり続けていくことの大切さを改めて感じました。
(安藤百合子)

◇ ◇ ◇

お盆は亡き人達への供養の場であり、同時に私達がたつた今、ここに存在しているということ自体が、先人達からの無限の恩恵であることに気づくことが大切であり、又感謝の気持ちを捧げることが、心の豊かさへ、つながる道となつていきます。いのちという無限の働きを実感し、ご先祖さまをお迎えして、心の通い合わせを重ねる中で、今日を最上の生き方、「仏道」に目覚めると共に、後の世を生きてゆく縁ある方々に向き合い、その心をお伝えし、

が、「あゝ、こんなに親爺さん、きちんと法語を書き移して、残しておいてくれたんだ」と言いながら、大切そうに、沢山の奉書に書かれた物を見返しておりました。

このようにふとした折、父を強く感じるでき事が、身の周りで起きることの幸せを感じています。

何百年も伝統の味を伝えるお店や様々な職人さんの伝統の技法も、創始者の思いを代々に伝えて下さっています。そんな大仰なものでなくとも、私達の身の回り、家の中にも、かつて故人達が思い、考え、使

い、心を通わせたものが、沢山あります。今回、私の父が自分の出来ることで、この寺の住職である娘の夫を、一生懸命、手助けしようとしていた思いに触れ、涙があふれそうになりました。

困難にあつたり、淋しさに打ちひしがれそうになつた時、父は私の傍にいつもいてく

お互いに支え合うのがお盆であろうかと思

照りつづく

うら盆の日の 夕辺なり

涼しかれとて

墓に水打つ



おん墓の 石をなでおり

幼くといだかれし

父の腕おもいて

一口伝導板

○私は過去にではなく

今日と明日に生きる

○地上には 多くの道がある

けれど

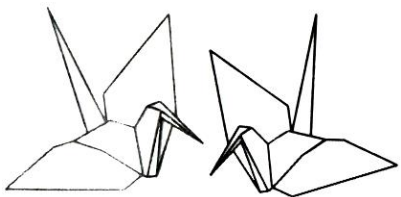
最後の一步は

自分一人で歩かねばならない

まごころの贈り物

墓地、境内地を見廻るたびに、供えられて
いるお花の多さに驚きます。

中には、おもちゃやお菓子も
墓石の台座に並べてあるのを
みると、おもちゃやお菓子を
亡くなった人が本当に喜ぶ
のだろうかといった理屈や理
論ではなく、そんなことは抜
きにして、そうせずにはおられない心の内
からほとぼしり出た、亡き人をいたみ、追
慕する・そんな気持ちに胸打たれる思い
がします。



人間の行為で最も尊いのは、見えないも
のに対する奉仕、おかげ様のおもいです。
それは見返りを求めない、純粋な行為で、
禅ではそれを「不染汚の行」と言います。
実際に喜んでいる姿は見えませんが、
「おばあちゃんはお花が好きだったから」

又、故人の遺志なので散骨をしましたが、
言われる方がいます。

どんな人も、生きていく上で、自分が主人
公のドラマがあり、悲喜こもごもの足跡が
あります。人間は一人では生きられるわけ
がなく、必ず多くの人々とかかわり、縁
を結んで生きてきたわけで、そういう御縁
を結んだ方々に偲び、懐しんでもらえたり
手を合わせ語りかけてもらえたりすること
は、何という喜びでしょう。

どんな人からの礼拝をも拒否し、一人、散
骨を希望する思いしかもてなかった、人生
とは何と淋しいものだったことでしょう。
— 思います。 —

つくづく死んだ後も、粗末にされない生き
方をしたいものだ。

ときれいなお花を供え、

「おばあちゃん、きれいでしょ」と語りか
けます。

「あの子が好きだったから」と、お菓子や
おもちゃを供えます。

想いが少しでも届くようにと、私達は目に見えないものに接します。でもそれは、無意味なことではありません。実際に供えるのは物ですが、同時に私達は、まごころを供えているからです。そのまごころこそが御霊に届くのだと思うのです。

しかし、このような追慕の念をもたれる
仏さまだけではありません。

近頃は「ほとけ（仏）ほとけ」などとい
つて、たまにお墓へ埋めつ放しで、お参り
することもなく、きれいに縁が切れてしま
ったかのように割り切った考えをもたれる
人もいるようで、そんな時「気の毒な仏さ
まだな」と思わずにおられませんか。

お寺から

○施餓鬼会円成の御報告

五月十二日（五月の第二土曜日）、恒例
の施餓鬼会がとり行われました。

朝から境内は、カレーラ
イス、やきとり、やきソバ
と食欲をそそる香りが立ち
昇り、午前中の総会のあと
皆さんでいただく昼食の準備に、世話人さんをはじめ
多くの方々が忙しくたち働
き、普段は静かなお寺も、
活気ある集いの場に大変身
しました。

お寺に集い、ご先祖様と
対話ができ、顔なじみの方
々と屋台の品々に舌鼓を打
ち、楽しい一日を過ごせる
ことの幸せを思った事でした。



○本堂屋根替え寄付金の御報告

護持会費から、一時的な雨漏りの処置をしていただいた本堂の屋根も近い将来、屋根替えをしなくてはならないだろうとの予測から、その基金として本堂内に寄付箱、寄付帖を設置して丸四年がたちました。

五月十一日現在で3026866円となっていて、多くの方々のお心のこもった浄財額に驚いています。

皆様方の御協力に感謝しますと共に、今後共の御力添えをお願いする次第です。

○永代供養について

当山では、開基の大森家はじめ、外護して下さった小田原城主北條家、大久保家など、又大森家にゆかりの深い三浦家などが昔の永代供養の始まりとなっており、お位牌も本堂の中に、まつられています。

このように、お寺で管理供養するのが、永

代供養のありようです。

さて当山には、境内に入ると右手に、お観音さまの立像が十体余建っています。

一体づつ、その台座部分がカロートとなり家族でお使いただけ、一般のお墓同様の形態となっています。年四回（お正月、春彼岸、盆、秋彼岸）供花をし、又毎日の朝のお勤めの際、永代供養の方々の菩提供養もおこたりません。

位牌もお寺で用意し、埋骨の費用共々、申込み時にお支払いいただいた永代供養料の中で、何霊でも支払われます。

少子化の世相の中、将来を思った時、お墓についての御不安をおもちの方もふえていると思われまます。

永代供養は、合祀の陵墓もあります。

御関心のおありの方は、お寺又は総代の小泉の所まで、お問い合わせ下さい。

